英語　世界共通語

国際化・グローバル化

ことばをめぐる問題

「英語は世界共通語？」

ねらい：１．世界で比較的広く普及している言語である英語のあり方について、「世界共通語」という観点から考えを深める。

　　　　２．英語をめぐる現状の問題に対してどのような取り組みがおこなわれているかということについて知り、ことばをめぐる社会状況や制度は必要に応じて変えていくことができるということに気づく。

３．自分自身がこれから英語や英語をめぐる状況とどのように向き合っていけばよいかということについて考える。

対象：高校生以上

所要時間：45分～

準備：物語シート、資料の印刷

進め方：１．物語シート①に沿って、ダイヤモンド・ランキングをおこなう。2人1組や各グループでそれぞれの結果や考え方を共有したあと、全体でも共有する。項目にないものも含め、「理想の世界共通語」の姿を自由に描いてみる。

２．物語シート②を読む。その後、意見カードと専門家による解説カードのそれぞれを読みながら、どの意見や解説が印象に残ったか、自分はそれぞれについてどう考えるかといったことについてグループで話し合う。

３．物語シート③を読んで、振り返りをおこなう。

留意点： ダイヤモンド・ランキングの結果などには、正しい答えはないことを確認しておく。設定が現実ではなく未来のことなので、学習者には実現可能性などをあまり気にせず自由に考えてみるよう促す。意見カードや解説カードはそれぞれを切り離して使ってもよい。

**物語シート①**

**「『世界共通語』作成会議 - 第１日」～理想の世界共通語！～**

　いまは西暦2092年。21世紀末です。地球上には数多くの言語（3000ほどでしょうか）が存在しており、ことばが通じ合わないという状況に出くわすことも少なくありません。かつて特定の言語が世界に広く普及しかけたこともありましたが、予想されていたほどには勢いは伸びませんでした。そこで、異なる言語を話す人たち同士でコミュニケーションを取るためのいろいろな方法が模索され続けています。

そんなとき、１つの案として人類にとっての「世界共通語」を新しく作ろうという計画が持ち上がり、わたしたちも一般人代表として予備会議に参加することになりました。まず会議の初日は、どこまで実現可能かはさておき、「理想の世界共通語」の姿を参加者みんなで描いてみるところから始まります。

手順は以下の通り。

最初に、「世界共通語が持つべき特徴」というテーマで、たたき台として下にあるような９つの提案（A～I）が出されました。参加者は「世界共通語」についてのお互いの考え方の共通点や違いを確認するために、これをもとにしてダイヤモンド・ランキングと呼ばれる手法を使います。提出された９つの提案をそれぞれ読んで、「世界共通語」にとって最も優先すべきだと思う項目の記号を一番上の○に、その次に優先すべきだと思うものを次の段の２つの○に、といった具合に自分が重視する項目順ですべて書き入れてみてください。この会議では、それぞれが書き入れた結果やなぜそう考えたかをお互いに共有しながら、そのあとは「理想の世界共通語」の条件について自由に考え合うことになっています。

【理想の世界共通語が持つべき特徴（９つの提案）】

1. その言語を通して、本や新聞や漫画やテレビなど、たくさんの情報を得たり楽しんだりできる。
2. 私的な場面だけでなく、ビジネスや国際会議など、いわゆる実用的な場面で幅広く使える。
3. 豊かな言語表現ができる。
4. 語彙（単語）や文法などの習得がやさしい。
5. 貧富の差や年齢や障がいの有無などにかかわらず、誰にでも学ぶ機会が開かれている。
6. 特定の言語に偏って似ているわけではないので、学ぶときに必要な努力についてはみんなが平等。
7. 国や地域などによって表現に特徴的な違いが生じても、お互いにことばが通じるための努力をし合おうというルールがある。
8. 各国や各地域にいまある言語と共存できるよう、言語としての役割があえて制限されている。
9. 時代の変化などに応じて、その言語自体や実際に使うときのルールを修正していくことができる。

優先順位が**上**

優先順位が**下**

**物語シート②**

**「『世界共通語』作成会議 - 第２日」～英語が世界共通語にふさわしい？～**

まずまず順調に進んでいた予備会議が混乱し始めたのは、２日目の午後のことです。

「やっぱり新しく言語を作って広めるより、昔から比較的広く普及している英語を世界共通語として使っていけばいいんじゃないですか？　いまや世界には多様な英語が定着しているから、結構平等ですよ。」

「ちょっと待ってくれ！　英語を共通語にしたら、国民が日常的に英語を話さないわが国は圧倒的に不利になる。われわれだけが英語教育の時間やコストを負担するのは不平等だ！」

「そもそもこの会議ではすべて通訳者を付けてやり取りをしているじゃないですか。結局、世界共通語なんかいらないのですよ！　それに翻訳機だってずいぶん進歩していますし。」

「あんなもの、まだまだ使い物にならんよ！　逆に誤訳が互いの誤解を招くことになりかねん！　それに毎回通訳や翻訳だけに頼ると、人材確保の問題や作業の煩雑さなど課題山積だ！」

「英語なんて、昨日議論した『理想の世界共通語の条件』をほとんど満たしていないじゃないか！」

「あんなものはしょせん理想論ですよ！　机上の空論で問題は解決しません！　もっと現実を見るべきだ！　現状では英語を用いるのが最善策です！」

　会議は一気に紛糾し、喧々諤々（けんけんがくがく）。お互いに椅子を投げ合わんばかりの勢いです。

　そのとき、議長を務めるブランケ博士の声が響き渡りました。

「みなさん、ご静粛に！　だいたい、専門家や政府関係者ばかりが発言するからこんなに揉めるのです。また、22世紀を前にして、英語をめぐってはいまだに懸案事項があることも確かです。そこで、一般人代表団の方々の意見を聞いてみたいと思います。特に、英語について感じているところを率直にお聞きしたい。と言っても、このままだと混乱が続くでしょうから、こうしましょう。今日中に代表団のみなさんに意見カードを書いてもらって、それをもとに議論しましょう。本日の会議はここで終了です。」

≪意見カード募集のポスター（日本語版）≫

　　　　　　　　　　「意見カードの募集について」

　親愛なる一般人代表団のみなさま

　本日の会議中にアナウンスした通り、「英語と世界共通語」についての意見を募集します。

　特にみなさまが日ごろ抱えている問題や疑問に思うことなどをご自由にお書きください。

　ごく個人的な見解でかまいません。どうぞよろしくお願いいたします。

|  |
| --- |
| * 提出期限：本日18時00分 * 提出場所：国際会議場１階ロビー前にある青色の投票箱 * 記述言語：このポスターを読める方は日本語でどうぞ。翻訳団が対応します。 |

　夕食後に提出されたカードを読み、議論の整理をする特別委員会を代表団から招集します。

　なお、先ほどもご説明しましたが、委員会の参加者は意見カードの記入をご遠慮ください。

*「世界共通語」作成会議議長　T. Blanke*

さて、わたしたちは特別委員なので意見カードは書かず、他の人が書いた意見を見ながら話し合います。

特別委員会では、ことばの専門家からもいろいろな説明を受けられることになっているようです。

**物語シート③**

**「『世界共通語』作成会議 - 第３日」～世界の言語と英語とわたし～**

　３日目は昨日の特別委員会で吟味した内容を踏まえ、急ピッチで残りの議題が話し合われました。英語を国際的な場面でどこまで用いるべきかについては議論の余地が残ったものの、「世界共通語作成プロジェクト」はこのまま継続することになりました。わたしたち一般人代表団は明日帰国しますが、議長を含め、一部の人たちは今回の議論をまとめて、本会議へと進みます。そろそろ会場を出ようかと準備していると、笑顔でこちらに歩み寄ってくる人がいます。それは他ならぬ議長のブランケ博士でした。

「ありがとう。３日間、おかげで有意義な議論ができました。今回の議題は『世界共通語』でしたが、わたしたちは世界の言語との関係を常に考えるべきです。わたしは、そこでどんな問題が起こり、一人ひとりがどう感じているかをもっと知りたい。そして、時にはバカバカしいほどに大きな理想を描いてみることも大切です。第１日目のダイヤモンド・ランキングとその後の議論を覚えているでしょう？」

　わたしたちが３日間の議論や一連のドタバタを思い起こしていると、博士はこう続けました。

「あなたは、これから英語を含めて、さまざまな言語たちとどのような関係をつくっていこうと考えていますか？　世界のことばのあり方はわたしたちみんなで変えていくものです。では、あなた自身はどうですか？　たとえば、英語を学び続けるなら、何のために、どんな英語を、どの程度学んでいくのでしょうか。あるいは、英語はもういいから他の言語を学ぶという選択肢もある。改めて自分の母語を見直してみるのもいい。…おっと失礼、一方的に話し過ぎました。まあ、これから、ゆっくり考えてみてください。そして、またいつかお話しましょう。ああ、そのときはお互い何語で話しましょうか、ねえ？」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　――おしまい。

◆３日間の会議を経て、考えたことや感じたことがあれば、自由に書いてみてください。

お疲れ様でした。

**資料①　一般人代表からの意見カード（①～⑧）**

|  |
| --- |
| **【意見カード①】**  わたしは小学５年生の時から学校で英語を勉強しています。英語学習は楽しいこともありますが、発音と綴りが一致していないから覚えにくいです（英単語のナイフ「knife」の「k」は何ですか！？）。また、覚えても覚えても新しい単語やイディオムが出てきます。こういうところは「世界共通語」としてふさわしくないと思います。 |

|  |
| --- |
| **【意見カード⑤】**  　英語が「世界共通語」になれば不平等だと言う人がいますが、それはもっと英語を広めて世界中みんなが話せるようになれば解決する問題だと思います。実際、わたしだってもともと英語が得意だったわけではないですが、就職してから必要に迫られて勉強し、仕事でも十分使えるまでになりました。要は努力次第です。 |

|  |
| --- |
| **【意見カード②】**  世界のみんなが英語を話すというなら、みんながみんなネイティブみたいに話せるようにならなくてよいと思います。そして、こちらが一生懸命に相手の言語を勉強してしゃべっているのだから、ネイティブ・スピーカーももっと譲歩して、こちらの英語に辛抱強く付き合ってくれてもいいのにと思うことがときどきあります。 |

|  |
| --- |
| **【意見カード③】**  英語は実際に世界のあちこちで話されていると思います（世界の全人口のうちどのくらいですかね？）。わたしの国では英語ができなければ大学にも入ることができないので、特別好きでもないのにやらされるのはうれしくはないけど、「世界共通語」として英語を学ばなければならないという現実は仕方がないと思っています。 |

|  |
| --- |
| **【意見カード④】**  英語だけが「世界共通語」として特別扱いを受けると、英語国とそうでない国の間や、英語国に生まれて簡単に英語を習得できる人とそうでない人の間には不平等が生じると思います。生まれつきの肌の色や階級で差別するのと同じです。やはり「世界共通語」を新しく作るか、平等にするための国際的な対策が必要だと思います。 |

|  |
| --- |
| **【意見カード⑥】**  いまや英語はイギリス人やアメリカ人だけのものではありません。わたしの国は過去に英語国の植民地だったため、国民の多くが英語を話すようになりました。でも、それは自分たちのもともとの言語や文化が入った新しい英語です。わたしたちはその英語に誇りをもっており、このように多様な英語の価値をもっと認めていくべきです。 |

|  |
| --- |
| **【意見カード⑦】**  世界にはたくさんの種類の英語があるということを英語の先生から聞きました。実際、英語のリスニングの試験でもいろいろな国のなまりのある英語を聞き取らなければならないので大変です。「世界共通語」にするなら、もっと統一してくれたほうがわたしたちには学びやすくてありがたいです。 |

|  |
| --- |
| **【意見カード⑧】**  正直、わたしの国では外国語ができなくても十分生きていけます。全員が英語などを話せる必要はないし、少なくとも自分には必要ないです。そもそも世界共通語もいらないと思っています。それから、友達の中には英語よりも他の言語を学びたいと言っている人もいますが、英語に比べてあまり学ぶ機会が与えられていません。 |

**資料②　専門家による「英語と世界共通語」についての解説カード（①～⑥）**

|  |
| --- |
| **【解説カード①】**  　外国語として英語を学ぶ人々にとって、国際的な場面で十分に英語を使いこなすことは簡単ではありません。そこで、共通語として英語を使う場合に、英語の文法や発音と綴りの仕組みを簡略化したり、単語の数を制限したりして、英語そのものを学びやすく改造するというアイデアが何度か出されています（これまで、日本人、イギリス人、フランス人などが提案）。たとえば…   1. 英語から不規則性を取り除く（たとえば動詞の不規則変化をなくす）   　　　（例）seeの活用形 saw, seen → seed  　　 speakの活用形 spoke, spoken → speaked   1. 基本的に使う単語を1000語前後に限定 2. 難しい単語は言い換えて、使う単語を減らす   　　　（例）nephew（甥） → the son of my brother（兄弟の息子） |

|  |
| --- |
| **【解説カード②】**  　英語は世界に広がるとともに、各地のさまざまな言語の影響を受け、文法、発音、イディオムなどが非常に多様化しています。すると、同じ「英語」と名乗っている言語同士でも話が通じなくなる可能性があります。そこで、さまざまな英語の間でのコミュニケーションの際にどの部分を意識すればよいか、「通じやすさ」の基準づくりの研究がなされています。例えば、発音の場合は以下の通りです。  ＜「わかりやすさ」の基準としてあまり重要ではないもの＞  ・theの“th”が正確に発音できるかどうか  ・LとRの発音の区別  ・イントネーション  ＜「わかりやすさ」の基準として重要なもの＞  　・子音だけ発音すること（例：didn’t … 母音を挟んで「ディドント」といってしまうと通じにくい） |

|  |
| --- |
| **【解説カード③】**  　　国際的な場面で英語を使うとき、母語として英語を使っている人とそうでない人の間に、有利／不利が生じてしまうことがあります。そのような問題に対処するため、専門家の集まる学会の研究大会で、通常の英語ではなく「Poor English（なんちゃって英語）」を共通言語にしようという提案がなされました。そうすれば、誰もが「ネイティブ・スピーカー」を気にすることなく、自分なりの英語を使えます。「多少通じないことがあってもお互いに譲歩し合おう」ということがルールとしてはっきり示されるというわけです。たとえば、こんな具体的なルールを提案した人もいます。   1. 決して話者の発音を訂正してはならない。 2. 決して話者の文法的間違いを訂正してはならない。 3. ただし、自分より話すのが下手な人の「言いたいこと」をより適切な文に「言い換え」て対話を継続することは許される。 |

|  |
| --- |
| **【解説カード④】**  　　国際的な場面でどんどん英語が使われるようになると、英語を使える人と使えない人、そして英語国と非英語国の間に不平等が生まれるという考え方があります。たとえば国同士の関係では、非英語国は英語教育のために多額の予算が必要になりますが、逆に英語国側は英語教師を派遣するなどして利益を得ることができます。その不平等を少しでも解決するために、「英語税」という制度を導入しようというアイデアが出されたことがあります。つまり、国際政治、国際経済、国際交流、国際コミュニケーションなどさまざまな場面で使われる英語を課税し、それによって得られた資金を少数言語の復興やコミュニケーションの平等のために使おうという考え方です。どこまで実現可能かはさておき、なかなか思い切ったアイデアですね。 |

|  |
| --- |
| **【解説カード⑤】**  「共通語」としての英語の勢いがあまり強くなりすぎないようにしようという取り組みもあります。欧州連合（EU）では、国際的な会議や文書で英語も多く使われているものの、他の言語にも公用語の地位を与えるなど、少数言語も含めて加盟国の言語的多様性を守ろうとしています。EUでは、英語だけでなく、ブルガリア語、クロアチア語、チェコ語、デンマーク語、オランダ語、エストニア語、フィンランド語、フランス語、ドイツ語、ギリシャ語、ハンガリー語、アイルランド語、イタリア語、ラトビア語、リトアニア語、…などなど、数多くの言語が公用語になっています。もちろん、通訳や翻訳には予算がかかりますが、みんながその分のお金を支払うとすると一人ひとりの負担はかなり少なくなります。また、EUではすべての人が生まれてから使っている自分の言語（母語）に加えて他に2言語を学ぶようにすることを推進しています。このように、ただひとつの「世界共通語」に頼るのではなく、たくさんの言語を共存させていこうという考え方もあるのです。 |

|  |
| --- |
| **【解説カード⑥】**  　　実は、「世界共通語」を作ろうという発想は昔からあり、これまで実際に多くの言語が作られてきました。その中でももっとも有名で、もっとも世界に普及したのが1887年にザメンホフという人が発表した「エスペラント」という言語です。エスペラントは学習しやすいよう文法や発音などの決まりがシンプルに作られています。たとえば、名詞はすべてoで終わり、形容詞はすべてaで終わるので、単語の識別や暗記が簡単です。  （例）【名詞】　学生→studento（ストゥデント）　　 　パン→pano（パーノ）  　　　　　 【形容詞】特別の→speciala（スペツィアーラ）　　暇な→libera（リベーラ）  　　また、enoughを「イナフ」と読む英語のような特殊な綴りや文法の例外がありません。そして、「ネイティブみたいな発音」も存在しないので、発音の良し悪しも気にせず話すことができます。一般にはあまり知られていないようですが、エスペラントの話し手は世界中のあちこちにいるのです。 |

＜参考文献＞

■書籍

安達信明『ＣＤエクスプレス　エスペラント語』白水社、2005年。

田中克彦『エスペラント―異端の言語』岩波書店、2007年。

津田幸男『英語支配とことばの平等―英語が世界標準語でいいのか？』慶應義塾大学出版会、2006年。

鳥飼久美子『国際共通語としての英語』講談社、2011年。

■ウェブサイト

・内田樹の研究室（2010年5月12日付の記事）「リンガ・フランカのすすめ」

　　http://blog.tatsuru.com/2010/05/12\_1857.php

・欧州連合（ＥＵ）のポータルサイト

　　http://europa.eu/